THUNDER FESTIVAL

Vol.7

モフっとコネクト

あの日…人間の姿に生まれ変わった私は
真っ暗な森の中を歩いていた…

不思議だったのは何も見えない森の中で
二度も木にぶつからず石につまずく事もなく
まるで森が意思を持って自ら私を
避けているかのようだったこと

そして朝日が昇り始める頃には
どこか懐かしい匂いのする
広い公園に辿り着いていた

私には転生以前の記憶はまったくなく
僅かに覚えていた事と言えば
とても仲良しだった友達のことだけ…

しかし会いに行こうとしても
場所もわからず行く術もない私は
この公園でただ待つことしか出来なかった

ただ待つと言っても
やはりお腹は減ってしまう

皆に会える日までこの公園で
生き延びと決めた私は
ゴミ箱に捨ててあった残飯で
飢えをしのいだ

幸いにもこの公園はとても広く
天気の良い日はピクニックに来る
家族連れが多かった

そのためゴミ箱を数箇所も覗けば
何かしらの食料にありつくことができたし
水飲み場もあったので喉を潤す事は簡単だった

公園にはたくさんの木々が茂る場所があり
私はそこに拾ってきたダンボールで
雨風を凌ぐための家を作った

毎日ゴミ箱とダンボールの家を
往復するだけの日々……

そんな単調で退屈な生活は
私の思考をどんどん鈍らせ
本来の目的も

そして仲良しだった
皆の顔も記憶の奥深くに
沈んでいった……

梅雨に入り雨の降る日が続く

公園に遊びに来る人々の足は遠のき
食事を得られる回数は次第に
減っていった

食料を探すために
行動範囲を広げ
普段は行くこともない
場所にも足を運んだ

花の蜜、木の実、他にも
食べられる物は
何でも食べた

しかしたいした量は採れず
ついに限界がきてしまう

視界は薄れ音もだんだんと
遠くに聞こえてくる

頭に浮かんでくるのは
皆の事ではなく
ゴミ箱に捨てられた
コンビニのお弁当のことだった……

このまま倒れてしまおう……
そう思った時

喉の奥から頭の天辺を
突き抜ける感覚が走り
カラカラだった口内に涎が溢れた

(食べ物の匂い!?)

久しぶりに嗅ぐ
おいしそうな匂いに
眩暈を起こしながらも
必死で林を抜け出すと

そこには空き地があり
青いビニールがかけられた
ダンボールらしきものが
いくつかあった

(あの中に食べ物があるんだ!)

一心不乱にその匂いがしてくる
青いビニールをくぐると
男が驚いた顔でこちらを見ていた

中は生活感溢れる物が散乱しており
私はすぐにここは
この男の家なのだと理解できた

我に返った私がかすれる声で
食事を分けて欲しいと泣きつくと

男は安心したのか
快く食事を分けてくれた

食事に夢中になっている姿を
男はすぐ横でじっと眺めていた

私はとても無防備で
胸の開いたゆるい服は
上から覗けば乳房が
はっきりと見えたし

短いスカートはどう座ろうとも
お尻が丸出しになっていた

しばらくすると男の手の甲が
太腿あたりに触れた

私に抵抗する気配がないと分かると
2度、3度と回数が増えていき
触れている時間も長くなっていった

私の腿に触れる度に男の息が少しずつ
荒くなっていく……

そして男は私のシャツに手を入れ
乳房をゆっくりと揉みはじめた

私は男がただじゃれているのだとしか思わず
くすぐったい感覚に耐えながらも食事の手を
休めることはなかった

食事を終えお礼を言おうと男の方を振り向くと
男が突然私の上に覆いかぶさり
服を剥ぎ取ろうとしてきた

私は裸を見られるのは平気だったが
服を持っていかれると思い慌てて抵抗した

冗談交じりに抵抗する私に
それまで無言だった男が

「すぐに済むから大人しくしていろ」と
強い口調で凄む

私は男を怒らせてしまったのかと勘違いし
もう怒られたくない一心で一切の抵抗をやめた

男は自分のズボンを脱ぎ捨てると
私の両足を広げ股に硬いものを
押し当てゆっくりと擦り付ける

しばらくするとクチュクチュと
音が響き始め同時に股に
ぬるぬるした感触が広がった

私がその違和感に戸惑っていると
今度は突然の痛みが体を突き抜けた

何が起こったのか分からない私が
恐怖と痛みで泣き叫ぶが
そんな私を無視して男は
その硬くなったモノを
股の奥へとねじりこんだ

その痛みに耐えるため
男の腕を力いっぱい握り締めた

伸びた爪が腕に食い込み
男が少し顔を歪める

「お前がそんな格好で
ここに来たのが悪いんだ……」
そう言って息を荒げながら
男は何度も腰を打ち付けた

早く終わって欲しい……
今すぐ自分の家に逃げ帰りたい……
そう強く思えば思うほど

男が繰り返す動作に
終わりがあるのかと
不安に押し潰されそうになった

しゃあっ

はっ
はっ

あっ
うっ…

しっ……

突かれるたびに漏れる
私の小さなうめき声と
男の息遣いが小さな家に響く

二瞬男の息遣いが止まり
体を硬直させると大きく息を吐いた

あっ
あ。

ほ。

ゆっくりと男が私から離れていくと
股にあった異物感はなくなったが
痛みだけはしっかりと残っていた

私がすすり泣きながら
うずくまっていると

男が干してあったタオルを差し出し
「これで体を拭いて早く服を着ろ」と
別人になったかのように
優しい声で私を慰めた

服を着て出て行く間際に男は言った

「また食う飯に困ったら
いつでここに来い」と……

私はタオルを握り締め
一度も振り返ることなく
男の家を後にした

翌日からも天候は安定していなかったが
晴れが続く日もありまたゴミ箱を漁る
生活に戻っていった

もうあんな思いはしたくない……
これからはまた自分の力で頑張っていこう
そう心に強く誓ったが

食料を自力で調達する難しさ
数時間おきに襲ってくる強烈な空腹感に
下腹部の痛みと共にその誓いは薄れ
私はまたあのビニールハウスの
前に立っていた

「ご飯を分けてください……」

男はまた驚いた顔を見せていたが
私の顔を見るとすぐに
食事の用意を始めた

食事を食べ始めると鼻息を荒くした男が
また私の全身を撫で回し始めた……

ゴミ箱からは拾うことのできない暖かい食事
こんなに美味しい物が食べられるのならと
私は男を受け入れる決心をする

あ…
あっ
あんっ…
くっ
くうう…

食事を食べ終わり私が自ら服を脱ぎだすと
男はこっちにこいと私の手を引き
家の外に連れ出した

外はすでに真っ暗で
いくつかあったビニールハウスは
殆ど見えなくなっていた

暗闇の中近くにあった木の前で
立ち止まり両手をつかされお尻を
突き出すような格好にさせられると

男の硬いモノが擦り付けられ
狭い穴を押し広げながら
ゆっくりと入ってきた

後ろから突き上げられる痛みに
うめき声を漏らすがもう恐怖心はなく
この行為が何なのかをただ考えていた

同じ間隔で打ち付けていた腰の動きが
少し早くなると男は小さく声を漏らし
私の一番深い所で動きを止める

ゆっくりと男が離れると
私の股からはポタッっと液が漏れた

あの日から私は夜になると
ビニールハウスの並ぶ空き地へと
通うようになっていった

男がいない日もあったが
性行為をすれば美味しい食事を
食べさせてもらえる

そう考えた私は食事の匂いがする
ビニールハウスを見つけては
食料と引き換えに
自分の体を差し出した

私の噂はすぐに空き地内の
人間に広まり
朝、昼、晩といつお腹をすかせても
誰かしらが食事をふるまってくれた

この頃になると
もう性行為の痛みは快楽へと
変わっており少しでも男達に
喜んでもらえるよう
自ら腰をくねらせていた

いつしか私はここの住人の
ペットのような存在に
なっていたと思う……

食事を貰えなくても
性行為をすることが
当たり前だったし

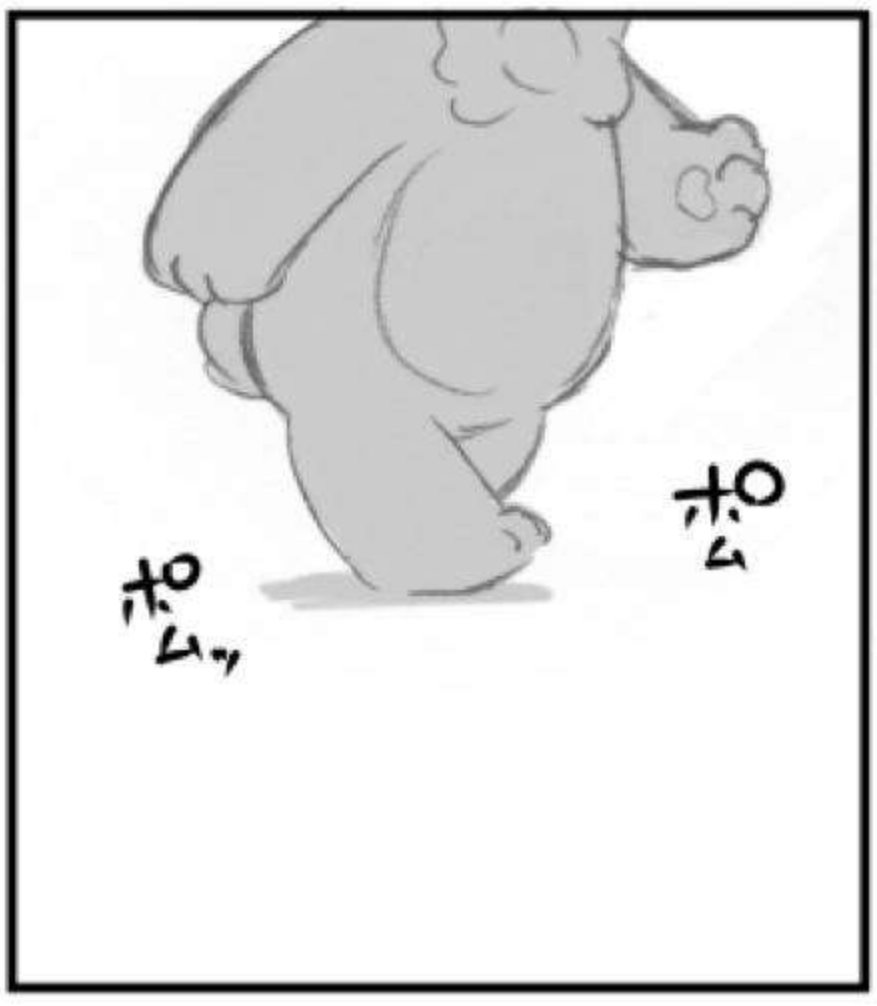
複数人の相手を一晩中
させられたりもした……

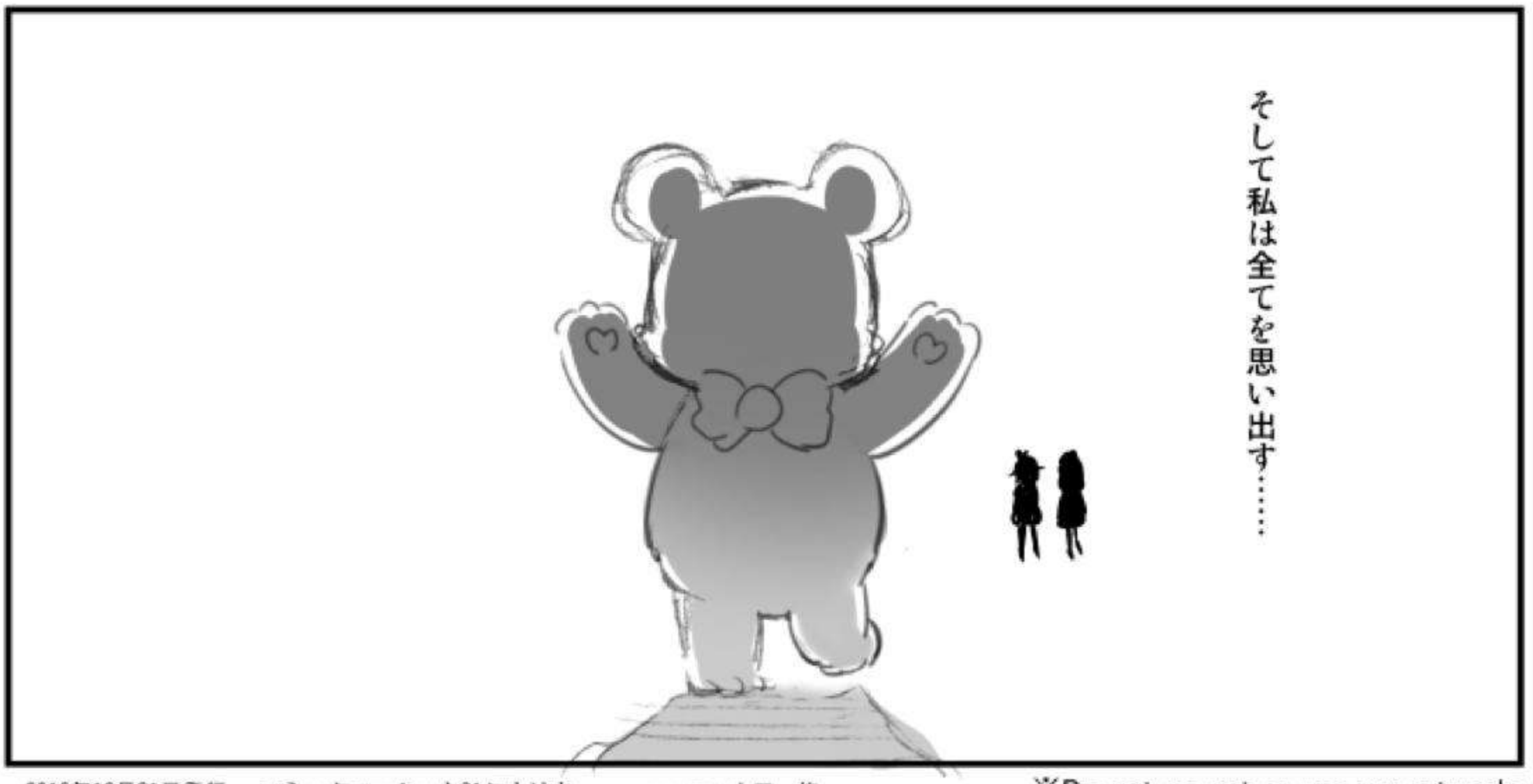
性行為が終わると私はふと考える
自分は何のために
生まれてきたのだろうか
何故食料を得るために男達に
体を差し出すのか

この公園で生き抜くため……？
それは私自身のためなの……？
生き抜いた先に何があるの……？
私は答えが見つからないまま
またゆっくりと
眠りに落ちていく……

朝になると鳥の鳴く声と
きつい日差しで目を覚ます
水道から出てくるお湯のような
ぬるい水をタオルに染みこませ
全身を綺麗に拭き
昨夜の汚れを落とす

そして大きなため息を吐き
私はまた男達の元へと
歩き出した……





※Do not repost or use my artworks